

カワウの若齢個体の割合とその変化

— 国営武蔵丘陵森林公園山田大沼コロニーの調査から —

○加藤ななえ・高木憲太郎・福井和二（NPO法人バードリサーチ）
森下英美子（エコ・プロデュース） 加藤洋（株）WMO）

関東の内陸部、埼玉県比企郡滑川町にある国営武蔵丘陵森林公園の山田大沼では、1995年冬からカワウがねぐらを形成し、1999年からは毎年営巣が観察されるようになった。最近のねぐら入り個体数は、少なくなる1～3月で約800羽、最も多くなる10月は約2000羽である。また、このコロニーでは、11月の中旬から12月を除いた期間、連続して繁殖が観察され、営巣数のピークが4月と9月にある。2004年4月から2006年3月までの2年間に調べた巣立ちヒナ数と幼鳥の割合のデータを元に、このコロニーにおける若齢個体の割合とその変化をみることで、幼鳥のコロニーへの定着について考察したい。

すべての巣で、毎月、ヒナの成長段階とそのヒナ数を記録した。そして、調査頻度が1ヶ月に1回であることから、親とほぼ同じ大きさになった段階のヒナを巣立ち出来るヒナとして、コロニー全体での巣立ちヒナ数を推定した。

カワウは、巣立った年の翌年の夏まで、全身の茶色味が強く見える幼鳥羽であることなどから、観察条件さえ良ければ、成鳥と区別することが可能である。そこで、多くのカワウがねぐらに帰還している日没の前に、場所の偏りが無いように約200羽を抽出して成鳥と幼鳥を識別して数え、全体に占める成鳥と幼鳥の割合を推定した。

2004年度の巣立ちヒナ数は603巣で487羽。2005年度は851巣で835羽であった。営巣数は、2年とも秋のほうが多くなっていたが、巣立ち率は春のほうが高くなっていった。幼鳥の割合が多くなったのは、どちらの年も、巣立ちヒナが多く出る5、6月と10、11月であった。春の繁殖期の後は幼鳥の割合が高い月が続いた。秋の繁殖期では、繁殖が終了した途端、全体の個体数も減少したが、特に幼鳥の割合が極端に低くなった。この幼鳥の減少について、関東のほかのコロニーやねぐらの状況も合わせて考察する。

なお、この調査の一部には、国営武蔵丘陵森林公園管理所の委託調査として行ったものを含んでいる。